

昭和五十八年五月  
飛鳥藤原宮発掘調査出土木簡概報(七)

# 藤原宮出土木簡(六)

奈良国立文化財研究所

藤原宮出土木簡(六) 訂正

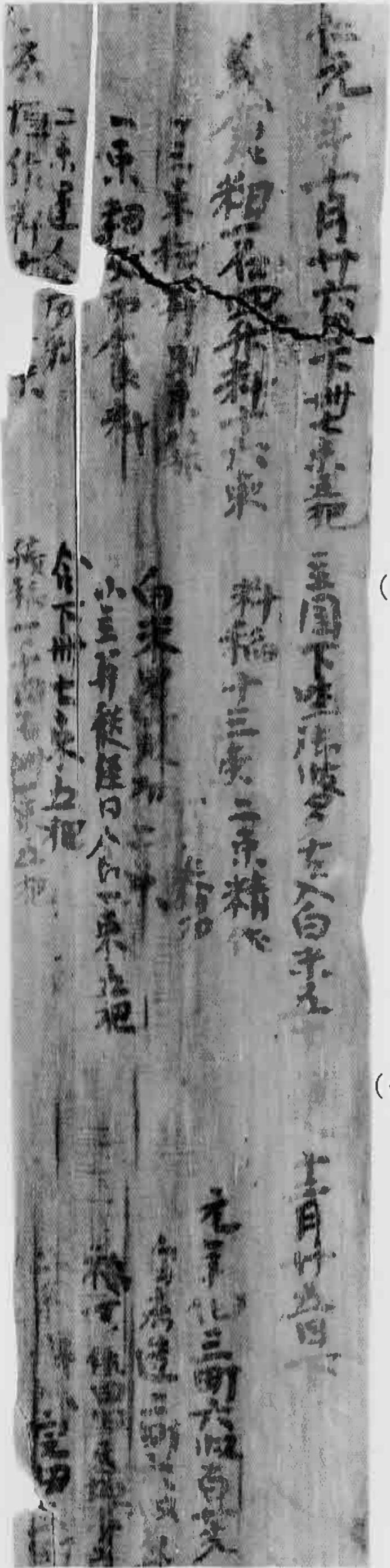
八頁「弘仁元年…」の右に「(以下別筆)」を加える。





(D)

(E)



(F)

(G)

(A)

奈科物...  
 依門...  
 法内...

(B)

今...  
 三月...

(H)

可上...  
 米...  
 暴...  
 元...



図版五 木簡1裏



(H)



(G)



図版七 木簡2表

2  
貞祿三の持夫一人切食三

貞祿三の持夫一人切食三  
六十七

(C)

図版八 木簡2裏下端・木簡1表裏全形・木簡2表全形



この概報には、さきに公刊した「藤原宮出土木簡(五)」(昭和56年5月)以後、藤原宮の調査で出土した木簡について、その主なものを収録した。なお山田寺跡出土のものを末尾に附載した。

#### 一、木簡出土の地点と状況

#### 第三六次調査 (6A J J—C区)

昭和57年12月～58年3月  
本調査は藤原宮西北隅を限る諸施設を確認する目的で実施し、一二〇〇㎡を調査した。調査地は南北二地区に分かれている(巻末遺構配置図参照)。

検出した主な遺構は、北区で西面外濠SD 260、北面外濠SD 145、井戸SE 3370、南区で河川SD 3408・3410・3411、井戸SE 3400等がある。木簡はSD 260から一点、SE 3400から弘仁元年銘木簡を含む二点(以下、弘仁元年銘を木簡1とし、他を木簡2とする)が出土した。

北区では西面外濠SD 260と北面外濠SD 145の交点を検出した。宮の西面を北流してきたSD 260はこの場所で北西方向へ流路を変えて宮外へ流れ出ており、西流してき

たSD 145は合流点直前の一六m程の間、一旦北へ約四m湾曲することが判明した。

SD 260は西岸が完全に出していないが、幅約一七m以上、深さ一・六mで、堆積土の中・下層で藤原宮期から平安時代の土器、上層で鎌倉時代の土器が出土しており、従来の所見と同じく、宮廃絶後もこの濠が長らく存続していたことを示している。木簡は西岸付近の溝底で削屑一点が出土したが、小断片であり、本概報には収載しなかった。他の遺物としては、瓦類、陶硯、土馬、墨書土器、帯金具等がある。

SD 145は、幅約七・五m、深さ一・五mで、奈良時代前半の土器が多量に出土した。おそらくその頃に埋没したのであろう。他には瓦類、削り掛け、藺笥、陶硯、土馬、「廿七」「六十五」などが読める墨書土器等が出土した。

井戸SE 3370は北区の東南隅にあり、井戸枠は一辺〇・八mで、隅柱を立てて横板を組むが、南辺は省略して掘形壁のままである。深さは一・〇mである。奈良時代前半の土器類が多量に出土した。

南区は大部分が河川流路である。河川は東北方からの主流路SD 3410と、南方からの流路SD 3411が合流し、西方

への流路SD3408につらなる。最大幅は一五m近く、深さは一・六mあるが、長年月の間に細流が何度も流路を変えて流れた様子がうかがえる。遺物はSD260と同じく、最下層では藤原宮期の土器を含み、上層では一三世紀の土器が出土したので、鎌倉時代まで存続していたことになる。

また、下層から出土した緑釉瓶の同一個体の一部が北区のSD260から出土したので、この河川はSD260へ合流していたのであろう。遺物としては大量の土器の他、瓦類、土馬、陶硯、金銅製蝶番、鉄製鋤先等がある。

南区は内濠および大垣の西北隅部分の想定位置に当るが、両方とも確認できなかった。河川が藤原宮造営時に既に流れていたとすれば、当初から造営されなかったか、あるいは位置をずらして造られた可能性もあるが、なお検討を要する。

井戸SE3400は南区の東北隅にあり、SD3410の北岸に接しているが、SD3410の岸が一部埋没したあと造られている。井戸枠の一边は一・〇mで、四方に、縦方向に溝を穿った隅柱を立て、厚い横板を落しこんでいる。現状で五段、一・一m分が残存している。埋土は暗灰色粘質土一層で、底面に小石を敷く。木簡1は上端から約八〇cm下のと

ころに横向きの状態になっており、木簡2は東北の隅柱に沿って斜めに立ち上がるように埋没していた。木簡の他、削り掛け、曲物底板、横櫛、土器、富寿神宝が出土した。掘形からも平安時代初頭の土器片が出土しているので、SE3400は短期間の利用にかかるとあろう。

なお木簡1・2について、釈読に必要な範囲内で外形上の観察結果について記しておこう。

〔木簡1〕長さ九八・二cm、幅五・七cm、厚さ〇・五cm。

樹種 檜・板目 型式番号 6011 出土地点CM25

一部を除いて四周はほぼ原形を存している。欠損しているのは左側（裏面では右側）で、特に上部では三分の一が欠け、表で「凡海福万呂」の記載の次の行の大部分（一行分か）、裏で「：凡海福万呂下充卅束」と「菁夢直五把」の記載の前の行（それぞれ二行分か）が欠落している。なお裏面最上段の記載は右端が完存しないが、木簡の幅からみて全部で五行までであろう。下部では最下段の左端〇・七cm程が欠けているが、一行分の記載が想定される。裏面は判読に支障はない。左側のその他の欠損部でも少々判読できない個所があるが、いずれも推測のつく文字である。

〔木簡2〕長さ八四・〇cm、幅五・一cm、厚さ〇・六cm。

樹種 檜・板目 型式番号 6081 出土地点 CM25

上下両端は原形を残しているが、左右両端は廃棄される以前に既に割除されている。墨書は木目の方向と若干ずれているため、木目に沿って割られた左右の面に対し、現状ではやや斜めになっているように見える。裏面は墨書があったものを削り取ったらしく、下方に削り残しの墨痕がある。

### 第三四次調査 (6AJM-B区)

昭和56年5月～57年3月

本調査は藤原宮西南隅の諸施設を確認する目的で行ない、約一五〇〇㎡を調査した。

検出した遺構のうち藤原宮期に属するものは、大垣(西面SA258、南面SA2900)、内濠(西面SD1400、南面SD502)、外濠(西面SD260、南面SD501)等がある。大垣、内濠はそれぞれの西南隅部分を検出したが、外濠は民家が所在し、調査できなかった。木簡は西面外濠のD260から一点出土した。

西面大垣SA258は七間分一九m、南面大垣SA2900は六間分一六mを検出した。柱間寸法二・七mで、いずれも

宮の外側方向への抜取穴をもつ。

内濠は大垣の内側約一二mのところにある。幅は二m内外、深さ〇・七mで、堆積土は三層に分かれる。上層からは多量の瓦が出土したが、中・下層は遺物が少ない。

西面外濠SD260はSA258の西約一六m程にあり、二七m分を検出した。後世の氾濫と浸蝕により著しく変形しており、幅が一〇mになる個所もあるが、当初の外濠流路の痕跡をとどめている部分から推定すると、濠の下底幅は五m程である。深さは南端で一・三m、北端で一・六mで、北流する。堆積層は五層に分かれ、最上層は一〇世紀の遺物を含むので、外濠は少なくともこの頃まで存続していたことになる。木簡は最下層の砂礫層から出土した。

南面外濠SD501はSA2900の南約二四mにあり、一〇m分を検出した。やはり二次的に拡幅、変形しており、西半北岸は北西方向に斜行する。溝下底では幅三mの当初の東西方向の流路痕跡を残しており、西流する。堆積層は西面外濠とほぼ同じ状況を呈している。

外濠の出土遺物は、木簡以外では、瓦、土器、円面硯、土馬、銭、人形、削り掛け等の木製品、獣骨がある。墨書土器は十二点あり、「稲器」「米」「道」「凡」などが読

める。

藤原宮期以外の遺構としては、弥生時代の井戸二基、土壙や溝、古墳時代の溝、土壙、藤原宮廃絶直後の掘立柱建物二棟、平安時代の掘立柱建物三棟、塀四条、井戸二基、堰、橋脚等がある。

#### 山田寺第四次調査（S B Y D—L区）

昭和57年8月～58年1月  
本調査は金堂の東の北区と塔の東の南区の二ヶ所において行なった。面積は六〇〇㎡である。

検出した主な遺構は、七世紀代では、山田寺東回廊S C 60、回廊の東側の南北塀S A 500、基幹排水路である素掘南北溝S D 530と石組南北溝S D 531、土壙、八世紀代では東西塀S A 505、土壙、瓦敷、平安時代のものでは掘立柱建物S B 501、瓦敷S X 535、南北溝S D 552、土壙等がある。東回廊は南・北両区に分かれるが、他はすべて北区で検出した。木簡はS D 531から二点、包含層中から一点出土したが、このうち判読可能な二点を収載した。

東回廊は、北区では北端から六・七・八間目、南区では一五・一六間目を検出した。北区では版築基壇と東側縁石、

礎石のほか、地覆石や地覆の一部が残存し、その上に大量の瓦が堆積していた。南区では回廊建物の東側柱列そのものが西方へ倒壊したままの状態が残存していた。倒壊の時期は、出土土器から一〇世紀末と推定される。

南北掘立柱塀S A 500は回廊の東約一七mの位置にあり、五間分を検出した。寺地の東部を仕切る施設の一つと考えられる。

南北溝S D 530はS A 500の東四・二mの位置にあり、幅一m、深さ〇・六mで、南流する。

石組南北溝S D 531はS D 530の東半に重複しS D 530の堆積層を掘り込んで作られており、南流する。幅〇・九m、深さ〇・二mで、東側壁は玉石を二～三段に積み、西壁は一段だけ積んでいる。堆積層は上下二層に分かれ、七世紀中頃から八世紀前半の土器が出土し、加工木片屑も多く含まれていた。木簡は上下各層から一点ずつ出土した。両溝の関係は、まずS D 530が七世紀中頃に造られ、七世紀後半にS D 531につけ替えられ、八世紀中頃には、S D 531も埋没したものと考えられる。

東西掘立柱塀S A 505は北区調査区南端にありS A 500のすぐ東から調査区東端までで二三間分を検出した。柱掘

形がSD531の積石を壊して掘られているので、SA505がSD531より新しい。またSA505を西へ延ばすと金堂心とほぼ一致するので、寺域の東半部を南北に二分する施設と推定される。

SX535は間層をはさみながら瓦を三〜四層敷いた土塁状の高まりとなっており、SA500やSA505の西端を覆っている。

掘立柱建物SB501は調査区東半部にある一間×二間以上の東西棟である。

南北溝SD552は回廊のすぐ東にある素掘溝である。

他の木簡一点は、SD531の東側北方で、平安時代後期から鎌倉時代にかけての土器を含む、回廊倒壊後の土層中から出土した。同層中からは押出仏三点も出土している。

## 二、凡 例

(一) 第三六次調査出土の木簡1・木簡2の原寸大図版を次の要領で掲載した。

イ、木簡1は表裏面とも全て掲げたが、木簡2は裏面の文字が僅少のため、表の全部と、裏の文字のみられる

下端部だけとした。

ロ、図版は紙面の制約上、木簡の一面を四〜五枚に切断しているが、それぞれ少しずつ重複させてある。

ハ、図版と釈文の両方に、木簡の各面の記載の適宜の個所に(A)〜(H)の記号を付し、対照の便宜をはかった。

ニ、末尾に木簡1表裏全形、木簡2表全形の図版を掲げた。縮尺は約 $\frac{1}{4}$ である。

(二) 第三六次調査以外の木簡釈文は、最上段に出土地点(アルファベット・数字)、次の段に形態を示す型式番号を記した。型式番号は次の通りである。なお本概報では千位の6を省き三桁の数字で表わした。

6011型式 長方形の材

6015型式 長方形の材の側面に孔を穿ったもの。

6019型式 一端が方頭で、他端は折損・腐蝕などによって

原形の失われたもの。原形は6011・6032・6051型式のいずれかと推定される。

6021型式 小形矩形のもの。

6022型式 小形矩形の材の一端を圭頭にしたもの。

6031型式 長方形の材の両端の左右に切り込みをいれたも

の。方頭・圭頭など種々の作り方があ

6032 型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいれたもの。

6033 型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいれ、他端を尖らせたもの。

6039 型式 長方形の材の一端の左右に切り込みがあるが、他端は折損・腐蝕などによって原形の失われたもの。原形は6031・6032・6033型式のいずれかと推定される。

6051 型式 長方形の材の一端を尖らせたもの。

6059 型式 長方形の材の一端を尖らせているが、他端は折損・腐蝕などによって原形の失われたもの。原形は6033・6051形式のいずれかと推定される。

6061 型式 用途の明瞭な木製品に墨書のあるもの。

6065 型式 用途未詳の木製品に墨書のあるもの。

6081 型式 折損・割截・腐蝕その他によって原形の判明しないもの。

6091 型式 削屑

(三) 釈文に加えた符号はつぎの通りである。

くく 抹消した字画のあきらかな場合に限り原字の左傍に付した。

■ 抹消により判読困難なもの。

□□□ 欠損文字のうち字数の確認できるもの。

□□□ 欠損文字のうち字数が推定できるもの。

□□□ 欠損文字のうち字数の数えられないもの。

□□□ 記載内容からみて上または下に少なくとも一字以上の文字を推定したもの。

「」 異筆、追筆

〕 合点

・ 木簡の表裏に文字のある場合、その区別を示す。

カ 編者が加えた注で疑問の残るもの。

マ マ 文字に疑問はないが意味の通じ難いもの。

〔 〕 校訂に関する注のうち、本文に置き換わるべき文字を含むもの。

( ) 右以外の校訂注および説明注。

第三六次調査 (6AJJ-C)

木簡1表 (図版一・二)

(A) 弘仁元年十月廿日收納箱事

合壹千五百  [玖]  [束]

(C) 同日下廿束

葛木寺進者

定残千四百八十玖束

(D) 使石川魚主

上三月丸第建丸

淨丸福丸等

(刻線)

(B)

山田女佃二町六段千二百卅三束

又有收納帳

凡海福万呂佃四段地子六段二百五十二束



收納帳

(刻線)



(A) □□ □□□束

糯米香料一束酒□□

祭料物并同料菁奈等持夫功一束

依門<sup>〔威〕</sup>□事太郎經日食二束

庄内神祀料五束

(B)

□□□<sup>〔年田作料〕</sup>且凡海福万呂下充卅束

凡海加都岐万呂十束

人之出學給十七束 民淨万呂三束

建万呂妻淨繼女二束 大友三月万呂二束

(C)

□一束

菁<sup>〔蔓〕</sup>夢直五把

節料物并久留美亦持行夫功一束

小主并從經八日二束六把自十二月廿日迄廿七日

合下百八十七束九把

残稻一千二百五十三束六把

(D)

○弘仁二年正月廿六日下百五十七束之中

在庄東廊□□又□<sup>〔塗〕</sup>漆□

□□□進丁京持行人功食一束

又在奈良馬船并厨子棚板及步板亦

官所庄持運車引建万呂六箇日

食并酒料三束日別一升六合食

又酒日別一升

木簡1裏 (図版四・五)

(E)

□□人之冬衣□<sup>買</sup>直錢代沽百五十三束直錢廿三貫七百十五文

□□□廿日下二百卅三束八把之中

・二年田作料且下百十八束<sup>受山田女</sup>残百八十束

・又凡海福万呂所佃作□<sup>料</sup>卅束依負下了

小主給出舉廿五束

(F)

凡海國人出舉廿□

同福万呂出舉給廿□

依□□<sup>成</sup>事小主并從經

十四日<sup>自正月廿日始迄三月三</sup>□□

食稻四束二把

二郎并從一日半食六把

(G)

在奈良馬船并厨子棚又步板直二貫五百□<sup>文</sup>代沽十六束

(H)

残八百卅束八把

又下廿束葛木□□<sup>等</sup>亦料

又下二束奈良在材木運車刺油四合直□<sup>直</sup>錢百七十文<sup>六十文</sup>別□<sup>合</sup>卅文

□□人酒手料建万呂□<sup>運</sup>

□<sup>受</sup>

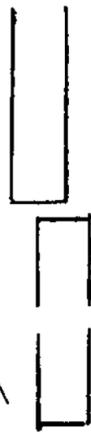
合下四百十二束八把

木簡2表 (図版六・七)

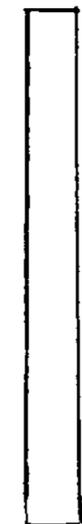
(A)

六年十二月八日春京上米一石五斗穎卅東<sup>三</sup> 馱賃十束  
 (合点) [二]  
 同年十二月廿八日京上米□石□穎廿三束 馱賃□束  
 [七]

(B)



(C) (別筆)



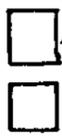
三斗直稻三束 持夫一人功食三束

豐村宮進送稻 (別筆)  
 同年十二月十八日京上米三石 穎六十七束加春功馱賃廿束  
 東□内稻□□東  
 [殿] [七]  
 (合点)

(合点)

木簡2裏下端 (図版八)

[積カ]



□五



料

第三四次調査 (6AJM-B)

西面外濠 SD 260

BI  
46

081

□□  
欲□<sub>2</sub>□

五<sub>年</sub>□<sub>日</sub>八月十九□

山田寺第四次調査 (5BYD-L)

石組溝 SD 531

LL  
16

081

□<sub>和</sub>□ □□□□ □

□ □ □ □ 負<sub>厩</sub>

□ (側面)

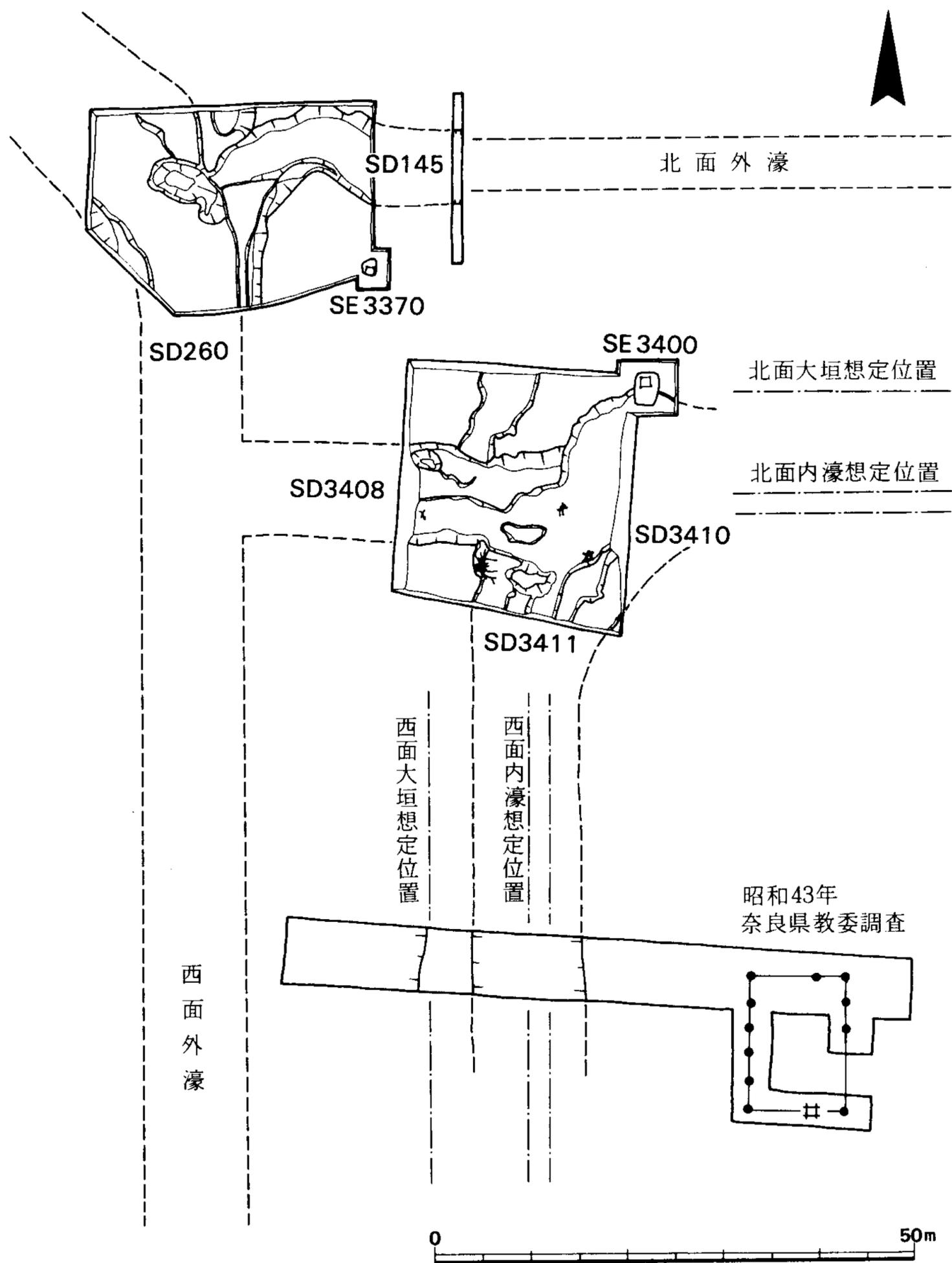
包含層

LN  
15

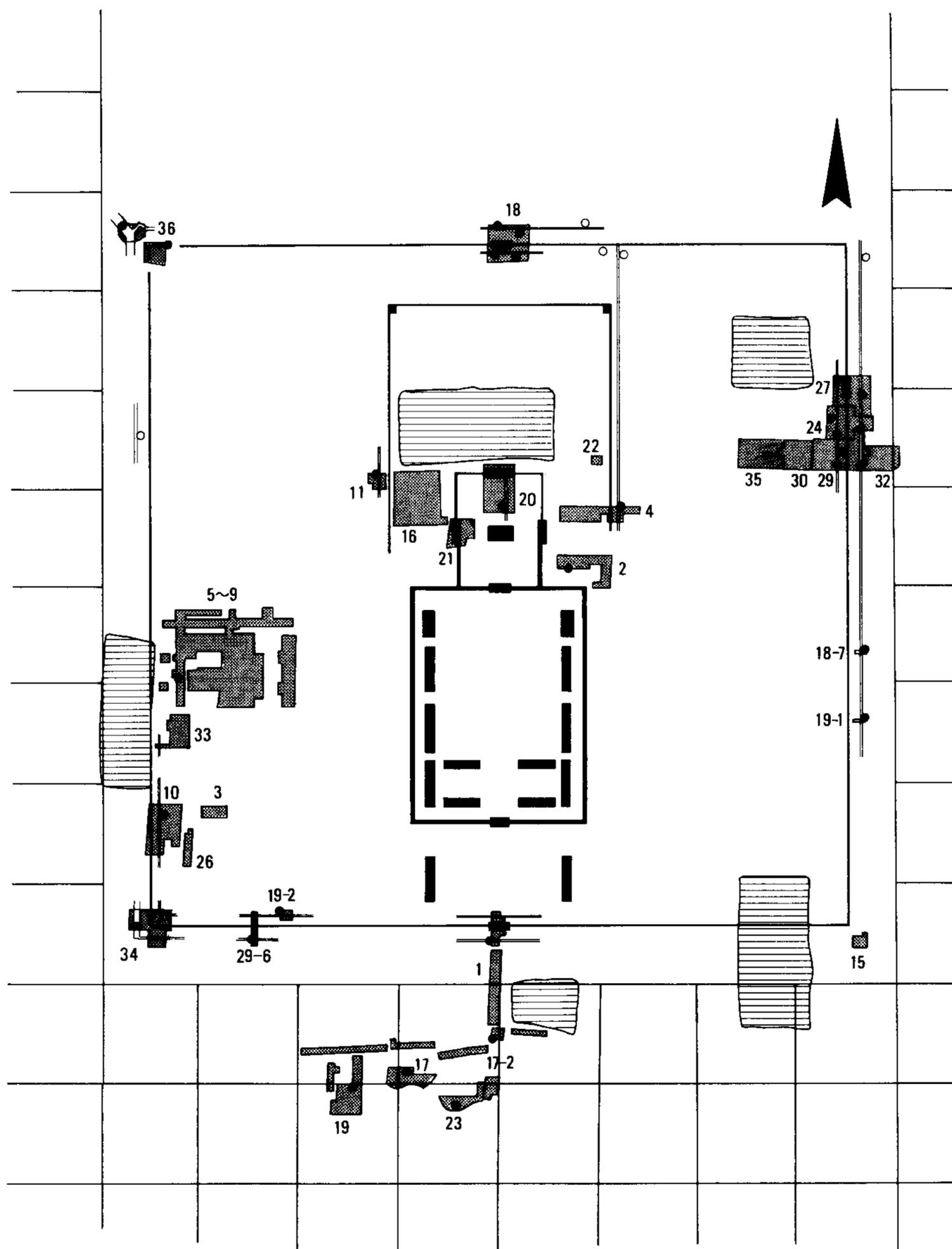
061

□□<sub>寺</sub> □□<sub>經論司</sub>  
(題籤)

# 第36次調査 遺構配置図



# 藤原宮木簡出土地点略図



● 文化財研究所調査  
○ 奈良県調査  
数字：調査次数